



写真11 窯元の展示即売コーナー。呉須(コバルト顔料)を使った染め付けが主体であり、大胆な抽象模様のものから精細な山水画を描いたものまで多種多様である。

6. おわりに

日本の磁器の中で有田とも九谷とも違う独特の味わいを持った砥部焼とその原料である砥部陶石の概要について紹介した。

愛媛県窯業試験場の佐川浩之元場長、管 雅彦氏には、現地での見学を案内していただくとともに、陶石の産状や性質などについてお教えいた

いた。

伊予陶磁器協同組合の関係者各位、(株)伊予鋳業所、宇都宮陶石鋳山、梅山窯には、鋳石の産状・精製過程や砥部焼きの生産過程を見せていただいた。ここに記して謝意を表します。

主要文献(直接引用していないものも含む)

- Higashi, S. (1980): Mineralogical studies of hydrothermal dioctahedral mica minerals. Mem.Fac.Sci.Kochi Univ.Ser.E.Geology, vol.1, p.1-39.
- 五十嵐俊雄(1984): 粘土質試料のノルム計算(N88 BASIC プログラム). 地質ニュース. no.353, p.34-47.
- 宮久三千年・堀越和衛・松垣 淳・佐川浩之(1974): 砥部陶石-その現状と将来性. pp.12. 砥部町産業課.
- 永井浩三・堀越和衛(1953): 愛媛県伊予郡砥部町付近の新第三紀層. 愛媛大学紀要第Ⅱ部, I, p.119-132.
- 金岡繁人(1968): 愛媛県上尾陶石及び兵庫県出石陶石中の長周期粘土鉱物について. 窯業協会誌, 76, p.72-80.
- 素木洋一(1970): 図説工芸用陶磁器-伝統から科学へ-. 技報堂. pp.469.
- 工業技術連絡会議窯業連合部会(1978): 日本の窯業原料. 工業技術連絡会議窯業連合部会. 879p.

SUDO Sadahisa and KAMITANI Masaharu (2000): "Tobeyaki" porcelain and pottery stone of Tobe area, Ehime prefecture, West Japan.

<受付: 1999年9月1日>

話題

「下絵付け」と「上絵付け」

砥部焼きでは一般に下絵付けが行われるが、これに対して上絵付けという方法もある。

下絵付けというのは、磁器の表面を保護する釉薬が溶けて形成されるガラス層の下側、つまり磁器とガラス層の間に絵付けがされていることから、下絵付けあるいは染め絵付けと呼ばれる。

これに対して釉薬をかけて本焼きをした後で、ガラス層の上に絵付けをしたのち、900°C以下の低温で再度焼いて、絵を固定させる手法を上絵付けという。

下絵付けの長所は、絵がガラス層に保護されるので、絵が安定し、強度・耐久性に優れた物ができることである。しかし絵の具は高温での本焼きの影響を受けて鮮やかさを失ってしまうこと

もある。

逆に上絵付けの長所は、耐久性には乏しいものの、高温での本焼きの影響を受けなくてすむためにいろいろな絵の具を使って鮮やかな色を出せることである。

古伊万里の呉須による青色の染め付けは一般に下絵付けであるし、鮮やかな色鍋島などは下絵付けした後、さらに上絵付けをする手法が用いられている。

上絵付けの場合、絵の具や張り付けたシールの輪郭が盛り上って見える場合が多い。こんな観点で、あなたの持っているその茶碗を見直してみるのも一興ではないだろうか。